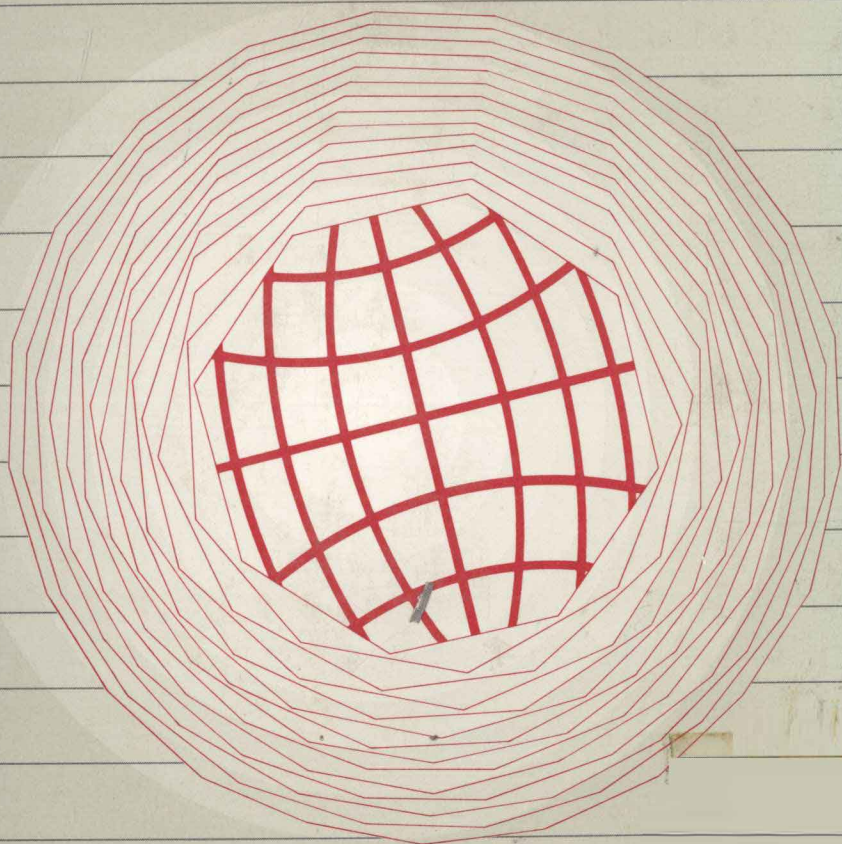


國際金融論

●
尾崎英二 著



東洋經濟新報社

國際金融論

尾崎英二 著

東洋經濟新報社

著者紹介

大正7年 京都市に生まれる。
昭和16年 高等試験行政科合格。京都大学経済学部卒業。
同年大蔵省入省。岡山税務署長、経済企画庁物
価政策課長、大蔵省為替局財務調査官、大臣官
房専門調査官、世界銀行理事代理・国際通貨基
金理事代理、東京銀行参与を経て、
現 在 専修大学商学部教授。経済学博士。
主要著書 『国際管理通貨論』大蔵省印刷局、昭和36年。
『世界銀行』日本国際問題研究所、昭和44年。
『新しい国際通貨の話』外国為替貿易研究会、
昭和44年。
『SDR』東洋経済新報社、昭和44年、増補版、
昭和47年。
『国際管理通貨』東洋経済新報社、昭和48年。
現 住 所 市川市須和田2-15-13。

国際金融論

定価 2000 円

昭和58年3月10日 発行

著 者 ^{おぎきえいじ} 尾崎英二
発行者 高柳 弘

発行所 東京都中央区日本橋本石町1の4 東洋経済新報社
郵便番号 103 電話03(270)4111(大代表) 振替口座東京3-6518

© 1983 <検印省略> 落丁・乱丁本はお取替えいたします。
Printed in Japan

3033-6634-5214

はしがき

本書は、大学の国際金融論のテキストとするのを第一の目的にして書いた。したがって相当広い範囲の問題を取り扱い、平易にしながら浅くならないように努め、前後一貫した考え方で全体を貫こうとした。そしてケインズの国際金融にかかわる生涯を通じての思想に特別の注意を払った。しかしIMF協定の逐条解説や改正外為法の解説などは通常の国際金融論のテキストの範囲をやや逸脱しているかもしれない。実は筆を進めるにつれて、テキストとしてだけでなく、一般社会人向きの読み物としても読んでもらえるものになりたい、さらに研究書のはしくれに入りたいと欲を出したのであるが、二兎ならぬ三兎を追って一兎を得ない結果になっておらねば幸いである。

本書には私の旧著、『国際管理通貨論』（大蔵省印刷局、昭和三十六年）、『世界銀行』（日本国際問題研究所、昭和四四年）、『国際管理通貨』（東洋経済新報社、昭和四八年）のなかから修正して引用した箇所が若干あることをお断りしておく。関係方面から得たご了解に対し感謝の意を表したい。第八章第二節「アサインメント・プロブレム」は『金融財政事情』一九八〇年七月二一日号の拙稿に加筆

修正したものである。金融財政事情研究会のご了解に感謝する次第である。第九章第四節「日本との関係」のうち「世銀の日本よりの資金調達」についての一九八二年一月末の統計数字は、世銀理事森岡政治氏にお願いして世銀事務局に調べてもらったものである。ご多忙の森岡氏がとって下さった労に對して、厚く御礼を申し上げる。第三章第一節「オイルマネー」と第一章第一節「イギリスの場合」は私の次男尾崎哲男（富士銀行ロンドン支店勤務）の協力を得た。また旧著『SDR』『国際管理通貨』にひきつづき、本書を書くにあたって、東洋経済新報社出版局の黒野幸春氏に格別のお世話になったことを特記して深謝の意を表したい。

一九八二年八月

尾崎英二

目次

はしがき

序章 国際金融	1
---------	---

第I部

第一章 貨幣論	7
---------	---

第一節 メタリズムとノミナリズム	7
------------------	---

第二節 金廃貨論	13
----------	----

第三節 貨幣の本質的機能	18
--------------	----

第四節 外国為替	19
----------	----

第五節 国際収支	23
----------	----

第二章 金本位制	31
----------	----

第一節 金本位制の特徴	31
-------------	----

第二節	金為替本位制	34
第三節	金本位制の変貌と崩壊	39
第三章	管理通貨	48
第四章	国際管理通貨思想	55
第一節	超国家銀行案	56
第二節	クリアリング・ユニオン案	61
第三節	ホワイト案	66
第五章	国際決済銀行	69
第II部		

第六章	国際通貨基金	79
第一節	英米間の交渉	80
第二節	専門家共同声明とアトランティック・シテイ会議	83
第三節	ブレトン・ウッズ会議	85
第四節	IMF協定逐条解説	85

第五節 IMFの活動	126
第七章 国際通貨改革	132
第一節 トリフィン説	132
第二節 オッソラ・レポート	134
第三節 制限付きフレキシビリティの報告	137
第四節 一九七二年のIMF提案	137
第五節 C 20の検討——暫定措置の実施	140
第六節 代替勘定	142
第八章 変動レート制	147
第一節 為替取決め	147
第二節 アサインメント・プロブレム	148
第三節 為替レートの未来論	156
第九章 世界銀行	159
第一節 世界銀行成立の経過と基本的特色	159
第二節 世界銀行の組織	164

第三節	世界銀行の財務状況と業務	167
第四節	日本との関係	173

第二〇章	二世銀	180
------	-----	-----

第一節	IDA成立の経過	180
第二節	IDAの組織、財務状況と業務	181

第III部

第一章	ヨーロッパの通貨問題	189
-----	------------	-----

第一節	欧州決済同盟	189
-----	--------	-----

第二節	スネーク	192
-----	------	-----

第三節	欧州通貨機構	197
-----	--------	-----

第二十一章	ユーロマネー	205
-------	--------	-----

第一節	ユーロマネーとオフショア・バンキング・センター	205
-----	-------------------------	-----

第二節	ユーロダラーの性格	208
-----	-----------	-----

第三節	ユーロマネーの規模	209
-----	-----------	-----

第四節 ユーロ円	212
第三章 オイルマネーと開発途上国	214
第一節 オイルマネー	214
第二節 開発途上国の累積債務	217
第四章 ドル本位制	220
第五章 為替管理	223
第一節 イギリスの場合	224
第二節 西ドイツの場合	225
第三節 日本の場合	229
第十六章 日本の国際金融	246
第一節 間接投資	247
第二節 直接投資	252
第三節 貿易金融	254
索引	254
巻末	

序章 國際金融

國際金融とは定義の不明確な概念である。そして國際金融論は比較的新しい学問である。戦前の日本の大学の講義には、外国為替論は特殊講義として存在しても國際金融論というものはないに思ふ。もちろん第二次大戦前の日本にも國際金融論という著述はあった（たとえば、井川忠雄『國際金融論』改造社、昭和一〇年）。そこではおおむね金本位制とその崩壊や為替管理のことなどが論じられていた。しかしそのころにしても、國際金融とは定義の不明確な概念であった。

國際金融は厳密に狭義に解すれば、國際間にまたがる公私の長短期の金銭的貸借ということであろう。これは國際收支概念の對外投資と外資導入に該当する。しかし今日は國際金融を、複数の国民国家からなる世界經濟の貨幣的側面というように広義に解することが多い。そして國際通貨制度 (International Monetary System) 論というものを國際金融論の中心に置くことが多い。ちょうど金融論——これは大体内金融論である——において中央銀行論を中心に置くことが多いのに似ている。國際金融論においては、世界中央銀行がまだ欠けている現状であるということが、金融論（国内

金融論）に対比した場合の特色となっている。

初めに国際金融とは定義の不明確な概念であると述べたが、それは外国為替論を含んだり含まなかったりするところによくあらわれている。狭義の国際金融（国際間の貸借の問題）は外国為替（外国通貨の売買の問題）とは原則的にカテゴリーが異なる。その意味で外国為替市場と国際金融市場とは区別される。しかし外国為替市場と国際金融市場とは切り離せない存在である。また外国為替は、国際間の金融の方法として利用されてきた歴史を持つし、広義の国際金融論に外国為替論は欠かせない。

現在、日本の大蔵省には国際金融局という部局があるが、それは一九五〇年代から六〇年代半ばまで為替局と称していた。業務の内容はさほど変わらないままで名称が変わった。このへんにも国際金融の概念の不明確さがあらわれている。ちなみに大蔵省の国際金融局に相当する日本銀行の部局を、外国局とよんでいる。以前は外国為替局と為替管理局とがあり、一九五〇年頃には外国為替局だけがあった。それを外国局という漠然とした、一見不可解な名称に変えたのも、外国為替局としても国際金融局としても狭義に厳密に考えると名と実とが合わないように思われたためではないかと思う（もともと日本銀行外国為替局の前身も、外事局という漠然とした名称であった）。

とにかく国際金融は、まず何よりも、複数国の貨幣にかかわる問題であるという意味において、国際金融論は貨幣論からスタートすることが適切かと思う。そのなかで、国際金融とかかわりあいの深

い歴史を持つ外国為替について少し考え、それから金本位制の回顧にはじまる国際通貨制度論（国際金融論の中心的部分）に移ることとする。

第 I 部

第一章 貨幣論

第一節 メタリズムとノミナリズム

貨幣論という独立した講義などは今日どの大学にもないようであるが、国際金融論がなかった第二次大戦前には、ときに貨幣論という講義があったように思う。それは貨幣の本質をめぐるメタリズム（金屬主義）とノミナリズム（名目主義）の対立が二〇世紀の前半には後半よりも激しかったことを物語っているようである。世界的には一九〇五年ドイツ人クナップが著わした『貨幣国定説』⁽¹⁾がノミナリズムの元祖であり、金や銀が貨幣ではなく、マルクやポンドが貨幣だと主張した。その後、ベンディクセン、エルスターといったドイツの学者がノミナリストとして続いて出たので、彼らの説を総称してドイツ・ノミナリズムなどという。

とにかくノミナリズムが登場して、それに反対の考え方がメタリズムとよばれるようになった。人類の長い貨幣の歴史において、今から一〇〇年くらい前までは金・銀・銅が貨幣の原材料であるのが